

森の自由人 120

狸泥舟

高知市で一杯

八兵衛に飲み会の段取りを頼んだ。丸顔で小太り、どこから見てもお人好しだ。嫌な仕事も進んで引き受けてくれる、職場にあってはありがたい人だった。もっとも私は飲み会の設定を頼むぐらいで、嫌な仕事は自分で片付けることにしていた。自分で蒔いた種は、自分で摘み取る。やってみれば嫌なと言うほどのものはない。頭を下げて済むくらいならお安い御用だ。もっとも自分が悪くないときは、突っ張らないとだめだ。安易な妥協は地獄への道である。森林整備部長をしていたとき、現場に行ってはいろいろかき回すので、(水戸) 黄門とあだ名されていた。その時のお供がいつも彼だったので八兵衛(テレビ水戸黄門のおっちょこちょいなお供の名) というあだ名がついた。

ほぼ毎年、四万十市を訪れた帰りにはいつも高知市に寄って、昔馴染みと旧交を温めていく。陽ちゃんは中村営林署時代、前号でお話しした黒尊の担当区主任(現森林官) だった。主任会の会長をして、若手の兄貴分だった。上役に言い難いことを代弁してくれた。上役が嫌な顔をしても至って無頓着で、頼り甲斐があった。

名人は囲碁の上手で、土佐本因坊戦での棋譜が新聞に掲載されるぐらいの大した腕前だった。独身寮で夜遅くまで囲碁を打っていて、朝はいつも遅刻で職場の困り者だった。その割には役人道にも詳しく、上役の性格など読みが入っていた。私が部長だった時、労働組合と揉めたりすると、囲碁打ちがてら組合との付き合い方について指導が入る。喧嘩してたら出世できないと忠告されるが、わかっちゃいるけど黙ってられないのが私の性分だ。

つるちゃんは、熊本の出身だ。1970年代は高卒の採用者の多くを九州勢が占めていた。高知営林局でも四国出身者は少なく、ほとんどが熊本県の阿蘇や芦北だった。だから国有林は高知県の人口減少を食い止める役割をかなり果たしていたと言える。彼らの多くは結婚して高知県に留まったのだ。つるちゃんも黒尊の製品事業所にいた。自分の父親より年上の現場作業員に囲まれて、しかもただ1人労働組合が違っていた。20歳に満たない若者が剛毅なものである。

そうそう八兵衛はそのころの採用にしては数少ない高知県出身者だった。うちと同じで子どもが3人いて頑張ったのに、いまだに1人も結婚せず、しかも全員家にいる。母親の御三どん付きだから最高だという。これじゃ人口減少に歯止めがかからない。

この会の常連の吉っさんはもう90近い。入院していて今回は欠席。もうすぐ退院してまた飲めると嘯うそぶいているらしい。中村営林署の造林係長だった。担当区の仕事は造林が主体だったので、私たち主任には近い存在だったが、これがまた破天荒。ほとんど毎日飲みっぱなし。大の釣り好きで、今頃だと夜釣りのイサキを中村の市場に卸して朝帰り。それがあ
る朝居眠り運転して車を横転させた。幸い唇を切る程度の軽傷で済んだが、酒が飲めない。

そしたらヤクルトのおばさんに細いストローをもらって、おちょこの酒をチューチュー吸っていた。

もう1人、紅一点の姫御前。年齢不詳だが、ものすごい美人。というより、少女漫画から抜け出てきたようなかわいこちゃんだ。こうなるとある種の化け物だ。仕事をしない上司の私を見て発奮したのか、その後現場に出て活躍した。

毎度、異骨相やはちきんが評議（これも土佐弁。集まってわいわいがやがや）しても何も決まらんが、気がついたら集まっている。日本人の原点は、辺境の土佐にあり。

日曜市に寄ったぜよ



写真 1 日曜市 高知市ホームページから

一夜明けて、高知名物日曜市に行く。コロナからこっち多少出店が減ったような気がする。近隣の農家などが出店を支えていたが、おばちゃんたちの高齢化や跡継ぎの不足によって、こうした街路市も存続の危機に立たされている。

まず、迷わずに行くのが右上のいも天屋だ。単なるいも天と言うなかれ。乱切りしたサツマイモのうまさもあるのだろうが、フリッターのような衣の甘辛いような微妙な味付けがよい。高知では天ぷらといえ

ばさつま揚げのことで、この店では以前は熱々のさつま揚げも提供していたのだが、今ではほぼいも天だけといった感じである。

それからトマト。高知といえばフルーツトマトである。品種はふつうだが育て方、特に水やりの調整でここまで甘くなるというのだから驚きだ。

草花、特にオタク向けの蘭の類^{たぐい}が面白い。日本産のものは奥が深い。昔いたころはそれこそ吉っさんなど何鉢も抱えて増殖して小遣い稼ぎをしていたが、バイオ増殖ができるようになって、和蘭の価値は暴落した。私は特段高いものに興味はないが、石斛^{せつこく}と風蘭^{ふうらん}をつい買ってしまった。売り手のおんちゃんとの会話もはずむ。話題は米騒動にまで及び、米作りには金がかかるということ。機械も肥料もいいものでなければ、良い品ができないようになっていると嘆いていた。

神戸る

こうべる。土佐弁で新しもの好きのことをこう言う。神戸っちゅうとは、神戸で流行っているニューモードを着ているとか、とにかく神戸は新しもの好きの土佐では憧れの地だったようである。その神戸に2泊した。



写真 2 三ノ宮方面を望む

にも便利である。そこで次の日は、新神戸駅まで行き、布引ロープウェイでハーブ園に登り、あとは下り一方の徒歩で布引ダム、布引の滝、新神戸、北野異人館街、生田神社、三ノ宮へ下りてくることにした。

布引の滝ハイキング

神戸の特徴は、細長い地域に山岳、大都市、海が平行に同居しているところであろう。山好きとしては、六甲山系を縦走したいところだが、時間的余裕はないし、この老体では無理かもしれない。

幸い市内と六甲山系を結ぶロープウェイやケーブルカーが何本もあるので、それらを利用すれば手軽に楽しめる。今回選んだ布引ロープウェイは、溪谷と滝、湖水が楽しめる。いくつものゴンドラが循環するタイプのロープウェイで、乗車するとすぐに布引の滝があらわれた。全然大きな滝だった。すぐ向こうには住宅地も迫っていて味消したが、こんな町中に大きな滝があると



写真 3 布引の滝

は驚きだ。

ロープウェイの終点は神戸布引ハーブ園である。六甲山中の斜面に、約 200 種 75,000 株の花やハーブが咲き集う日本最大級のハーブ園だそうだが、私にはこんな自然の中に外来種を大量に持ち込んでよいのかという疑念があるので、率直には喜べない。しかし、世の中は外来種に埋め尽くされており、高速道路の^{のりめん}法面などオオキンケイギクで真



写真 4 ハーブ園

っ黄色である。もはや人為による外来種の蔓延は、自然の内と理解した方がよいのかも知れない。

それでもきれいなので、一応写真をあげておく。右の写真など、V字谷の逆三角形の限られた遠景に都市という最大の人工物と海を借景として嵌め込み、中景には六甲山の自然林の緑、近景にはハーブ園の作られた自然のカラフル。意図しなかったけど、面白い構図が切り取れていた。江戸や中世の絵師だったらどのように表現しただろうか。

布引の滝

ハーブ園の裏口から抜け出して、坂道を下る。あちこちにイノシシ注意の立て札がある。神戸のような大都市の裏山であっても野生動物の楽園である。夜な夜な三ノ宮に出かけるに違いない。



写真 6 布引五本松貯水池

きに、右側が下向きにずれるのだそうだ。幸い阪神・淡路大震災のときは動かなかったようだが、ちょっと恐ろしくなった。

その横に布引五本松ダムがある。水道専用としてはわが国初の重力式粗石コンクリート積ダムだそうで、1900年に完成した。堤体表面は厚さ 45~60 センチメートルの切石を布積みにした型枠で、裏にコンクリートを充填してから、そのまま外壁として残したものである。そのため外見は石積みのダムに見えて、まるで中世ヨ



写真 5 ハーブ園から望む神戸市街

つぎに現れたのは布引ダムの貯水池である。六甲山中にこんな大きな湖があるとは信じられなかった。照葉樹林の深い緑に抱かれて静寂そのものだった。

ところがその先のダムサイドに、とんでもないものが現れた。布引断層の露頭である。写真7の割れ目がそれだが、左側が上向



写真 7 布引断層

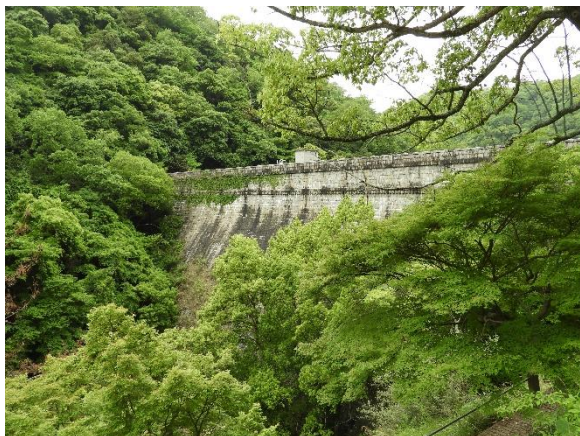


写真 8 布引五本松ダム

近な分、危険とも同居している。なるほど、厄封じのために生田神社と背後の生田の森があるのだろうか。

ダムから下は、本気の登山道である。深い溪谷沿いに細くて頼りない急勾配がつづく。登ってくる人がいるが、これは辛いだろう。当然ながらロープウェイを使って正解だった。時折、木立が途切れて神戸市内が見える。すでに高層ビルと同じぐらいの高さまで下ってきているようだ。



写真 9 見晴展望台からの高層ビル群

布引の滝は、伊勢物語にも登場する。上流から雄滝、夫婦滝、鼓ヶ滝、雌滝の4つの滝の総称である。ロープウェイから見たのは雄滝のようだ。これだけ水量があるということは、この水系の奥深さの現れである。実に滝らしい滝である。

平安からこちら在原業平はじめ多くの歌人たちが布引の滝を詠んでおり、その歌碑が建ち並んでいる。天下の名瀑である。



写真 10 雄滝（上）と夫婦滝